

Title	アントアンヌ・オーギュスタン・クールノーの片影
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.7 (1939. 7) ,p.951(95)- 974(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19390701-0095
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390701-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アントアンヌ・オーギュスタン・クールノーの片影

三邊清一郎

アントアンヌ・オーギュスタン・クールノー Antoine-Augustin Cournot の不朽の名著「富の理論の數學的原理に関する研究」*Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses*, 1838. が公にされて既に百年を隔てるが、昨年佛蘭西で出版された本書新版の編者は、彼の名の其國に於いて聞ゆることなほ少くことを言つて居る (Nouvelle édition, par Georges Lutfalla, 1938, p. 4.)。これは勿論誇張の言に相違あるまいが、しかしこのことは可成り長い間事實であつたらしく、「一八九〇年 G. タルドがその「模倣の法則」*Les lois de l'imitation*, 1890. を書いた時にその序文で、彼は「全生涯を通じて蔭で思索を続け、また死後に於いてもよくは知られなかつた」と言つて居る (4. ed., p. xxv.)。そして今日と雖も同胞の間では、寧ろ哲學者として有名なものでもあらうか、セリグマン編「社會科學百科辭典」*Encyclopaedia of the social sciences*, ed. by E. R. A. Seligman, 1931. に於ける同國人の筆になるクールノーの項では、經濟學者よりも「偶然」の論者として紹介されて居る (C. Baugé, Cournot, Antoine.)。

彼の活動の分野は廣かつた。或るものは哲學者として、或るものは學校行政家として彼を稱めた。「哲學的批判のサント・ブウヴ、判断が正確であると共に獨創的であり、透徹すると共に博學で、含蓄的な精神、深い幾何學者、非

アントアンヌ・オーギュスタン・クールノーの片影

凡の論理學者、型外れの經濟學者、新しい經濟學者等の、閉却された先驅者」とは前記タルドの讚辭である (Les Lois de l'imitation)。またD・ヴァイアルは彼を「現代教育學者の一人であると共にその先驅者」とする (De Vial, et l'enseignement, dans "Revue de métaphy."。しかし吾々が親しむのは、數學を經濟現象の説明に導入した「型外れの經濟學者」としてである。「佛蘭西人は、ケネー、バレット及びクールノーの三人の世界最大の經濟學者をもつた」とS・J・シムム・ペタヤの言葉は、多少の誇張を含むにしても、現代に於ける經濟學者の彼に對する評價を示して居るものを見出す (G.-H. Bousquet, Les "Recherches" de Cournot et leur centenaire (1837)。以下に於て私は主として數學派經濟學の創始者、殊に彼の經濟學への貢獻がその方法にあつたことを考へて、その角度から彼の姿を眺めたいと思ふ。

クールノーの生涯は、これまで種々の機會に紹介されて居る。しかし一つの意味でその後繼者であるL・ワルラスの父オーギュストと生年(一八〇一年)を同じうし、前後して巴里、エコール・ノルマルに入つて居ることは、次代に於ける彼の理論の再發見者等との時間的間隔を示し興味がないでなす (G. Leduc, Introduction, dans "De la nature de la richesse et de l'origine de la valeur", par Auguste Walras, 1881)。この學校は入學の翌年(一八二二年)閉鎖された。彼はこの時二十個月月額五十法の補助金を受けたが、この期限の切れる頃G・S・シール元帥の秘書となつた。かくて巴里に於ける生活の便宜を得、同じ年ソルボンヌ大學に入つた。將軍の下ではその戰爭記の執筆を補け、大學ではラクロア、アシエットの教を受けた。またこの頃佛蘭西科學思想界に於ける權威者達の知遇を得る機會をもつた。中にS・D・ポアソンの名を忘れてはならない。彼は數學者、物理學者、教育界に勢力があり、クールノーの數學に關する學生論文の價値を認めて、永く彼のために昇進の途を開いて呉れた人である。この間二十三年理學士、二十七年法學士、二十九年

理學博士になつた。そして一八三四年に初めてリヨンの數學教授に任命された。受持つた科目は微積分學である。この講義は、講師も講座もリヨンの學生に全く新しいものであつたから、初め多數の學生が詰めかけた。しかし對象の困難がわかると大部分彼の下を離れ、一箇月後には僅かに十人ばかりの聽講生をもつに過ぎなかつたといふ (Henry L. Moore, The Personality of Antoine Augustin Cournot)。彼はここで一年ばかり講義を續けた。これが直接學生を教へた唯一の一年である。翌年彼はポアソンの推舉でグルノーブルのアカデミーの校長になつた。一八三六年大學視察官に、三八年總視學官待遇に、四八年高等教育委員會の委員に、そして五四年にはドイツのアカデミーの校長に任命された。そして六二年巴里に隱退するまでこの職に留つた。

これ等の公的生活は彼の研究を妨げなかつた。彼はこの期間に盛んに論著を公にして居るのである。印刷に附された彼の稍々纏つた初期の文章に、サン・シール元帥の「軍事史參考記録」に附された同將軍傳その他がある。けれども單獨の論著としては、「富の理論の研究」(一八三八年)を處女作と見なければならぬS。(註)これは、リヨン時代にその大部分を完成して居たと稱せられる (in "Economie", July, 1938, vol. 6, p. 195)。その後「一八四〇年から一八五一年に亘つて科學上、哲學上の諸研究を著した。」 (Souvenirs, 1760-1860, quoted from "The Personality", Economic Studies, by H. L. Moore, p. 372)。經濟書以外の著述の主なるものは次の通りである。

「函數理論と微積分法の概論」一八四二年

「偶然と確率の理論の要説」一八四三年

「代數學と幾何學との間の聯關の起源と限界に就いて」一八四七年

「吾人の認識の基礎と哲學的批判の性質に關する一論」一八五一年

アントアンヌ・オーギュスタン・クールノーの片影

一年

「科學と歴史とに於ける基本理念の關聯についての一論

「佛蘭西に於ける公共教育制度について」一八六四年

「現代に於ける思想の發展と事象の發展に關する考案」一八六四年

「唯物論、生命論、合理論——科學の與件を如何に哲學に援用すべきか」一八七五年

「追想録」一七六〇—一八六〇年

註 彼自身も、「富の理論の研究」を以つて初めて世に著作家として立つたことを言つて居る。——「私が一八三八年に『富の理論の數學的原理に關する研究』と題する小著を公にして、確實に著作家として乗り出した時には、齡既に四十に垂んとし、しかもなほ片々たる小篇を書き、批評家、編纂者若しくは翻譯家として自らを試みて居たに過ぎなかつた。」——

Principes, au lecteur, p. 1.

しかしこの間彼は經濟學上の諸問題に特に注意を拂つた。このことは上記哲學及び數學上の著書に於いても數々窺ふことが出来る。その例としては、「現代に於ける思想と事象との發展」中に「ライブニッツの該博な天才が、その經濟能力と名付くるところのもの將來に於ける重要性を表示した」ことを強調し(Toib. 2^e)、また「科學と歴史とに於ける基本理念の關聯」の中に、「經濟科學の基本理念が順次に現はれて來なければならなかつた」こと、等が擧げられるかも知れない(*cf. Principes, Au*)。彼は後者に於いて、「一般に經濟學といふ名を與へられるかの科學の特質を明かにし、他の學問との關係、その科學の領域に於ける地位、その基礎觀念、その用ふる方法、その達し得る結果の價値、それが必然に經驗並びに與論の誘導に委さねばならぬ部分を指示する」に努めた(ロ・E)。經濟學に最も縁遠い著作「代數學と幾何學との關聯の起源と限界」に於いてさへ次の如き記載を見るのである。

「序に、悟性内に於ける數學觀念の發達の順序が社會制度發達の順序と如何に對應——一が他を言はば密かに支配するにより——して居るか、注意して置きたい。商業の起源ともいふべき貨幣制度によつて、その物理的性質をいたく異にする諸物が、その交換價値に於いて比較し得るものとなつた。すなはち諸物は一の單位または共通尺度を取得することが出来、商業的價値が算術的な大いさまたは量として成立するに至つた。かくて商人がその處分を俟つに、貨幣を金庫に、若しくは商品を倉庫に入れて置くことが(抽象概念を現實諸物に適用する限り)どうでもよいことになつたのである。續いて信用の發達が起つた。信用により(同様の範圍に於いて)、商人の資本の増減運動は、資産及び負債が平衡する點の兩側に等しく行はれ得るものとして考へられる。だから商人の信用が不變なる限り、その各部分の資本は貸方から借方へ、またその反對に流動することが出来、そしてその作用は、任意の價値を商人の資産に添加し若しくは削減するによつて、任意にその原因を變更する場合と異ならない。換言すれば、商人の資本はまづ算術量として成立し、商業制度のこの新しき發達によつて代數量となつたのである。この形容は、任意の原因をもち得る量、更に一般的には、その増減が對稱的作用をなし、一方が他方と等しく無限に延長され得る量を示すより、深い意味に解せられる。」(*H. L. Moore, The Personality, p. 393, 94*)

H. L. Mooreの「彼の科學上の興味は根本に於いて社會的であつた」との批評は正し(*Ibid.*)。つまり偶然が彼を經濟學に投じたのでなく、思想上の動因がこれに導いたのである。すなはち單なる思ひ付でなく、彼の持つ思想體系が彼を學說上の改革者たらしめたのである。(註)かくて最後に筆を執つたものは再び經濟書、「經濟諸學說概観」であつた。彼は經濟學の論著を以つて學界にデビューし、經濟書を絶筆としてこの世を去つたのである。

註 彼の經濟學とその哲學上の著書との關係に就いては、猶ほ René Roy, *L'œuvre économique d'Augustin Cournot, in*

“Econometrica,” April, 1939, p. 134-36. 参考。

II

経済學に於ける彼の著作は次の三である。

「富の理論の數學的諸原理に関する研究」 *Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses*. 1838.

「富の理論の原理」 *Principes de la théorie des richesses*. 1863.

「經濟諸學說概観」 *Revue sommaire des doctrines économiques*. 1877.

彼の學史上に於ける地位を決定的のものたらしめたものは、言ふまでもなく、數學と經濟學とを結付けた第一の著書であつて、後の二者は、大雑束に言へば、最後のものは「原理」の要約、「原理」は數式を省いた「研究」の再論である。これが後に、ドビットルが彼の經濟學上の諸著作を紹介した時、「彼はある意味に於いて唯一冊しか書物を書かなかつた」と言ふと共に、「その一冊の書物を二度書した」と言ひ得るとした所以である。その中に展開されて居るものは、同一思想の發展である（Edgard Depire, *Notes sur les œuvres économiques d'Augustin Cournot*, dans *Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales*, 1908, p. 189）。

しかし武人の傳記を書き、解析と認識論に没頭して居たこの若い數學者を驅つて、幾何學と富の理論とを結合せしめたものは何であらうか。彼は富の理論の反覆を後の著書に於いて説明して居る（*Principes*, au *lecteur*, p. ii.）けれども數學的な最初の論著の發生に就しては言及して居ない。それは彼自身の筆になる「追想記」*Souvenirs* 1760-1860 にも説明がない。これはジイド・リストによつて提起された疑問であるが、未だ何人によつても満足に答へ

られて居ない。「事實は學說の發生、殊に純粹な科學的解釋のそれを説明するものでない」といふのが、ジイド、リストの見解である（C. Gide et C. Rist, *Histoire des doctrines économiques*, 3. éd. 1920, p. x.）また F. 馮・ヘルは「經濟と數學が偶然にクールノーに於いて同一悟性の中に交叉したのだと言つて居る（François Bompaires, *Du principe de liberté économiques dans l'œuvre de Cournot et dans celle d'école de Lausanne*, Paris, 1931, p. 45.）しかしそれは著者の言葉を尋ねて遂に解かれ得ない謎であらうか。

クールノーは「富の理論の研究」の執筆に當つて、A・スミス、リカードオ、J・B・セイを読んだ、そして「普通の言葉に訴へるだけで充分と考へた著者」にあつては、分析は一般に「不確定であり、また屢々不明瞭」であると評した（*Recherches*, p. 10.）。「著者の中には、スミスやセイのやうに、政治經濟學の論述に當つて、その文體に純文學のゆる雅致を保持した人々もある。がまたリカードオのやうにより、抽象的な問題に近づき、或はまた大ひに正確を求める場合に、代數を避け得なかつた人々もある。しかも彼等はそれを退屈な、冗長な算術的計算で糊塗したのであつた。」（*Ibid.*）リユトフアラは本書序文中に於けるこれ等短い章句を以つて、充分問題解決の鍵を與へるものと考へる。すなはちクールノーのやうな綜合に熱心な、計算の方法に練達した理論家が、リカードオのかうした部分を讀むに當つて、それに代數的な書替を試みないといふことはあり得ない、と云ふのである。彼は言ふ、國際貿易の等式は正にかかる試みを容すものであるまいか。言ふまでもなく古典の研究は一般に常に最大満足の原理を援用し、解析の方法を要求するものである。彼がこの數學的書替を爲すに當り、ソルボンヌの師達がその確立に努めた不定函數の理論に訴へなすことをあるだらうかと（*Recherches*, nouvelle édition, Introduction, p. viii-x.）私はこの疑問に同意する。殊に「社會現象は確率理論の應用に、人口統計學、保險理論への、そしてクールノーが「社會算術」*Arithmétique sociale* の名で示すかの二團の問題には全般的の、その使用が示すやうに、特に適して居る」からである（René Roy, *L'œuvre*）。

Economique d'Augustin Cournot, in)
«Econometrica», April, 1939, p. 135.)

彼の「研究」に於ける方法論はその序文に要約されて居る。「大いさ間の関係が問題となる場合、数学の符號の使用は常に自然である。従来とても上に述べたやうに、抽象的な問題を取扱ひ、また大いに正確を求める場合に代數を避け得なかつた人々がないでなかつた。しかし彼等は概して富の理論に對する數學的分析適用の性質を誤解し、符號並に公式使用の目的は、單に數的計算に導くにありと考へて居る。けれども問題は、明かにかやうな理論のみに依る價値の數字的決定に適しない。「數學解析に長ずる人々は、その目的が單に數を計算するに止まらず、進んで數的に表現し得ない大いさ間の関係を見出すためにも、またその法則が代數的記號で説明し得ない函數間の関係を見出すためにも用ひられることを知つて居る。」「富の理論から生ずる一般問題の解決は、本來初等代數學に依頼するものではない。それは、單に一定の條件を満足するに過ぎない不定形の函數を取扱ふ解析部門に依頼するものである。これが私がこの論文で確立しやうとするところのものである。」(p. vii-ix)

彼はこの新しい方法を用ふるに嚴格であつた。商品の價格が買手の數、その欲望及びその支出し得る收入と共に増加し、賣手の數と熱心に比例して減少することを知つてこれを代數的な言葉に移し、 $B + A_x$ を變數 x の増加函數、 $B - A_x$ を減少函數の形としてこれを理論的根據として出發するカナル (J. Bertrand, *Recherches sur les principes par Augustin Cournot, Paris, 1838, dans «Recherches»,*) の如きは彼にとつて「根本的に誤れる」ものであつた (p. vii.)。彼はまたその方法の効果と限界とを知つて居た。彼は「數學的分析を適用し得ない問題、若しくは既に充分明白と思はれる問題」に對してはこれを用ひない (p. x-xi)。そしてこのことが彼をして、經濟學に全く新しい本質的な分野を開拓させる効果をもつたのである (A. Aspetit, *Le Œuvre économique de Cournot, dans*)。彼は後年の著書「富の理

論の原理」に於いてこの方法を放棄した。しかし私はそれによつて、彼がこれを積極的に排除したものとは考へない。普通の言葉を用ふる他の著者の方法を「不正確と考へ」、前著に於いて「その不精確を指摘した」と信ずるに於ては、後著に於いても變りはなく (Principes, Avnt, その經濟學への建設的價値は依然これを認めたものと信ずる。この點に就いては猶ほ後に觸れるところがあるであらう。

彼より以前、一八三一年に A. ワルラスが經濟理論の數學的性質を豫見して居た (A. Walras, *De la nature de la richesse, nouvelle édit.*)。しかし一八三八年に於いても、往年に於けると同様、これに同意を表するものはなかつた。クルノー自身も「著名な理論家の非難を身に引受くべきこと」、「口を揃へて數學公式の使用に反對ある」べきことを豫期した (p. vi.)。けれども結果はなほ悪るかつた。それは完全に黙殺された。例へば J. デュビュイが獨占下に於ける價格形成を取扱つて居る場合がそれである。彼は全くクルノーの「研究」を無視する (G. Lutfalla, *Introduction, L'œuvre économique d'Augustin Cournot, in*)。I. フォイッシュは、一八三八年より七一年の間に數學を經濟學に應用した著者は約三十人あるけれども、彼等は多くクルノーを知らず、また互ひにも相識するところが少なくなつたと言つて居る (I. Fisher, *Cournot and Mathematical economics, in «Quarterly journal of economics, Vol. 12»,* 事實後世經濟學史上に於ける地位を不動ならしめたこの書も、公刊の初め數年間は一冊も賣れなかつたと傳へられる (C. Rist, *Guide et Histoire des doctrines, 3.*)。一八七三年にクルノー自身もワルラスに宛てて、彼の著書が孰れも出版後幾年も多數讀者を獲得しなかつたため、出版書肆の評判の香しきことを書して居る (A. J. Nichol, *Tragedies in the life of Cournot, in «Econometrica», July, 1938, p. 193, cf. Revue, Avant.*)。I. ワルラスはこの書の不人氣を、それがリカードの經濟學その儘の再生であり、何等新鮮味な

き點に歸して居る(Recherches, p. 64. Appendice, p. 230-31)。この言も恐らく眞であらう。しかしそれは亦確かに、その數學公式が讀者を億劫がらせたにも由るに相違ない。シェヴォンズすら「經濟學純理」第二版(一八七九年)に於いて、「本書を手にしたのは一八七二年だが、精讀したのは漸く最近のこと」であり、「數學の力が不充分なので、クルノーの分析の有益な部分に就いて隨つてゆくことが出来ず、今日と雖も彼の著書の隅々まで消化して居る譯でない」と告白して居るのだから(P. xxxiv.)。

三

「研究」が初めて世の批評に上つたのは、「原理」が出版された一八六三年である。それは彼がデイジモンを隠退した翌年であり、「研究」發表の後二十五年である。この年青年學徒レオン・ワルラスが「インデペンダン・ド・ラ・モーゼル」(Indépendant de la Moselle)の「富の理論の原理」の紹介を書いた(Léon Walras, Principes de la théorie des richesses, Indépendant de la Moselle, 13 juillet, 1863, 本文は A. Cournot, Recherches, nouvelle édition par G. Lutfalla, 1938, 2. Appendice, 2. 収録されて居る)。それは勿論本書の書評として書かれたものであるが、内容は實ら「研究」に觸れるところが多い。彼はこの文章に於いてクルノーの數學の經濟學への應用を、「眞摯な、名譽ある、そしてこれまでなされたこの種の試みの唯一最初のもの」であり、「純粹經濟學の將來に關係するところ極めて大なる」旨を述べて居る(Cournot, Recherches, n. éd. par G. Lutfalla, Appendice, p. 238)。彼は更に一八七三年八月巴里の Académie des sciences morales et politiques に於いてクルノーの「研究」を紹介し、この書に對して適當の注意を拂ふべきことを要求した。

「クルノー氏は、卒直且つ眞面目に經濟學に數學の應用を試みた最初の人である。氏はこれを、一八三八年に公にされ、また私の知る限りでは、佛蘭西の學者がまだ誰れも批評に上ばせない「富の理論の數學的原理」に關する研究」と題する著作に於いて爲したのである。多年私自身も純粹經濟學を、數學的な一自然科學として建設するに努めて居る。私はクルノー氏とは異つた經濟原理に基き、異つた數學上の方法によりそこに到達した。氏は無制限の競争に達するため獨占から初める。私は一般の場合である無制限競争から出發して、特殊な場合、獨占到到達する方がいと思ふ。氏は通常微積分を用ひる。けれども私は、少くとも基礎理論の設定のためには、解析幾何の初歩的な公式に頼るだけで成功した。かやうに吾々の研究は決して混同されない。私が氏から借りたのはその方法だけだ、と言ひ得ると思ふ。しかしそれだけで既に充分だ。私は素晴らしい試み——それに就いては何何等批判が加へられて居らないことを重ねて述べ、従つてまた正しい待遇が與へられてないことを敢へて言ふ次第であるが、——を行つたこの著者を顯はしたいと思ふのである。(Léon Walras, Principes d'une théorie mathématique et politiques, dans le "Journal des économistes", 3. ser. Tom. 34, p. 78. de l'échange. Lu à l'Académie des sciences morales et politiques, dans le "Journal des éco.")

しかしここに注意すべきは、彼の尊重するものは、クルノーの方法であつて、その理論でないことである。「第一の論文」「研究」を指すは、數學的見地から見ても甚だ満足すべきものであり、その方面にては微積分の適用に多大の修練を示して居るけれども、經濟學の見地からするならば、その甚だ然らざるを言はざるを得ない。蓋し著者は殆んどこの關係に於いては、リカードの經濟學に何等變化を加へることなく採用するに止まつて居るからである。しかもこの後のものは嚴密に批評され、大いに修正されることを最も必要とするのである。」と言ふのである(Cournot, Recherches, n. éd. Appendice, p. 230-31)。彼の一般均衡論が「研究」の發展したものでないことは言ふまでもない。彼はその後多數の機會に、「私はその經濟學の根本原理を父オーギュスト・ワルラスに藉り、この學說のために函數計算を用ふる根本原理をクルノーから借用した」と述べて居る(Léon Walras, Eléments d'économie politique pure ou théorie de la richesse sociale, éd. déf. Paris et Lausanne, 1926, p. viii. cf. Lettre de

Léon Walras à A. Cournot, 20 mar, 1874.)
in "Econometrics", vol. 3, Jan. 1935, p. 123.

私は前に、後世に於いて不朽の名を得た彼の著書も、同時代の人々に完全に黙殺され、出版の當初には殆んど一冊も賣れなかつたことを述べた。この恐るべき無關心を克服するため、彼は一八六三年前著に於いて「不可欠」と考へた數學公式を省く、「富の理論の原理」を著して世に問ふた。曰く、私は確かに數學の領域に屬する諸關係並びに理念を表現するために、數學記號の利用が有利になつたものと信じ、また技術家を目指して特に數學が研究せられ、殊に大企業にいい地位を得んがため技師の資格が求められる時代に、相當数の讀者あることを期待して「研究」を書いたのである。しかし「私は誤つて居た。」一八三八年以來學界にはS・ミル、リスト、バスターアのやうな獨創的な學者が輩出し、また經濟界には諸種の革命が行はれて、これを繞つて活潑な議論が行はれた。けれども「社會經濟の興味ある問題に私の論理と代數とを應用する」私の努力は認められて居らないやうである。「私が今日望むのは、私が觀念の根本に於いて謬つて居たのか、或は唯々形式だけを誤つて居たのかを知るに在る。この目的のために、私は再び一八三八年の小著を取上げてこれを訂正し、發展さすべきものは發展させ、前に觸れることを控へた點を補足し、殊に、その内容を億劫なものにして居る代數の使用を全然省いた」と(Principes, Au.)。しかし數學的記號及び形式の慎重な使用が、經濟問題の議論に常に有用なることを信するに於いては、敢へて變化があつた譯ではない。だから彼は、「幾何學の證明方法を用ひないで幾何學的精神の嚴密さを保存するため、簡單、明瞭なるための有ゆる努力を惜まなかつた。」(Ibid.) 唯々本書では、數學的方法の適用に限界あることを、より明白な言葉で述べて居る。「最も正當に、速かに特定純理論的假定の結果に導く數學的方法にも、是等の假定に自然現象の解釋には事實

もつが、社會現象のそれに等しくもつとは言へない價值が歸せられる懸念がある、といふ難點がある。吾々は多大の注意を以つてしなければこの方法を用ひてはならない。また同様に、一般の判断がそれに反對のやうならば、その使用を全く諦めなければならぬ。蓋し一般の判断は、個人のそれを決定するものよりも、より確實な隠れた理由をもつことを殆んど誤らないからである。(Ibid. p.) (註)。

註 しかし彼の方法が、依然として演繹的であつたことと言ふまでもない。經濟學の問題に經驗は不可能だといふのである。「經濟的諸事實に對しては、臨床醫學の場合と同様に、觀察、檢索、試驗は許される。けれども正しい意味での經驗、結論のない經驗、眞に科學的な經驗は許されない。それは、例へば、醫師がその考究するところを實行に移すやうなものである。國民なり、個々の人が問題である場合、一制度、一治療法を試験することは可能である。けれども人間性が働いて居る現身に實驗することは出来ない。」— Gaétan Proux, les Théories de l'équilibre économique, L. Varias et V. Pareto, 1934, p. 112.

この方法の相違が、彼の著述の對象に「一變化を齎らした。彼に據れば、政治經濟學 *l'économie politique* — 富の理論 — は確かに「一科學」である。しかし「この科學は現在なほ斷片的な状態にあり、且つその特定部分は永くこの状態を續けるであらう。それは未だ完全に、決定的に構成されたもの——一般に承認された確實な基礎の上に立つといふ意味で——と認められる諸科學に見るやうな、規則的な、體系的な、そして常に進歩的な構成を許すに至つて居ない。また將來ともあるまい」と思ふ。(Ibid. p.) 社會經濟學 *l'économie sociale* と富の理論 *la théorie des richesses* とは區別しなければならぬ。前者は道徳、哲學、政治、宗教に於ける思想を取入れ、その對象は正當な經濟的分野を超え、その解決は、議論の餘地ある適用」を容すのみで、「明確な積極的證明」を許さない。富の

理論は正しく言つて前者の経済的な一部分であつて、科學的形態を受容れることが可能であり、また既に容れて居るのである。「事實、生産條件若しくは商業關係の變化によつて價格が如何に騰落し、平衡を保つか、地主、企業家、労働者の間に利潤または損失が如何に分配されるか、が問題である。かかる問題が、力學または化學上の問題があり得ると等しく、純粹に科學的であること、觀察による確實な事實への計算の應用に基礎を置く解決を許すことは、誰れでも知つて居る。」しかし社會經濟學の中に、科學的な綜合、解決を許す部分が如何に少く、制限されて居るかを知らない。「富の理論は、その科學的な嚴格さと純粹さを保存せんとするならば、斷片的な状態を續ける。…その様な問題は、社會經濟學から導き出された、科學的形態を取ることが不可能であるか、若しくはなほこの形態を取るに至つて居ない其部分の問題に關するところの考察によつて、整理され、結合され得るに過ぎない。」(Ibid. p.) かくて「研究」では、彼は正しい意味で富の理論の領域に閉籠り、「原理」では、これ等不完全な斷片的部分を整理結合する、重要だがより純粹でない新發展が現はれて居るのである。(Edgard Depire, Note sur les œuvres économiques des doctrines économiques et sociales, 1908, p. 191-93, cf. Gaëtan Piron, Les théories de l'équilibre économique, L. Walras & V. Pareto, 1934, p. 105-.)

彼が本書の反響にどんな期待を懸けたかは、その次の言葉によつて知られる。

「第一審の判決〔研究に對する世の態度を指す。〕に對して控訴を提起するの三十年もかかつたのだから、その結果がどうであつても、勿論私はこの上告しやうなどは考へない。この訴訟に再び敗れるやうなら、私に残されることは、殆んどどんな不運な著者をも見棄てない慰藉、彼等を裁く判決が他日法自身の爲めに破毀されることもあらうと考へるその慰め、すなはち眞理のそれより外にあるまい。」(Principes, au) (Lettre de A. Cournot a Léon Walras, 1838年小著にもまして成功を願ひ得なかつた。)

3 septembre, 1878, in "Econometrics," 1935, p. 120.) 前に擧げた「アンデパンダン」に於けるワルラスの本書に對する批評は次の如きものである。「彼の小著『研究』を指す」を構成する二要素中、彼の棄てたのは、その獨創的、示唆的部分を成す數學的要素であつて、そして保存して過度に發展させたのが、その弱い一面である經濟的要素である。だから本書を批評するとなれば、その誤つた若しくは曖昧な、議論の餘地ある幾多の所見を指摘するより外がない。(Dans "Recherches" par édition, Appen.) シュツォンズも後に「前著に較ぶれば、興味及び重要さの點に於いて劣る」と評して居る。(V. S. The theory, 2. ed.) クールノー自身は「アンデパンダン」に於けるワルラスの批評を知らなかつたものの如く、「ミナル・デ・ゼコノミスト」Journal des économistes, août, 1864 のフォントネーの言葉を引いて、次のやうに言つて居る。

「私は少し經つて——私自身は少しもそれに係らなかつたのであるが——一八三八年の訴訟に勝つたにしても、一八六三年の訴訟には負けたのである。すなはち誰れかよく溯つて私の代數を尊重して呉れたものがあつたにしても、私の散文〔數式を用ひない「原理」を指す〕は(その口にするのを恥づるのだが)書店の好評を得なかつた。ル・ジュルナル・デ・ゼコノミスト(一八六四年八月)は、私が「リカードで止まつてそれ以上に出ない」といふ點、經濟學の領域に於いて爰二十五年間に亘り多くの秀れた人々がなした發見を考慮しなかつたといふ點に就いて、特に私を非難した。かくて佛蘭西經濟學界の誰れ一人その名を擧げなかつた憐れな著者は、逆に他の人々を充分に援用しなかつたといふ非難を受けることになつたのである」(Revue sommaire, (Avant-propos, p. iii.)) (註)

註 フォントネーの批評は、察せられるやうに、彼に最も好意のないものであつた。前記引用と對照して興味ある部分を引けば、——

「私は一八三八年及び一八六三年の彼の兩書を手に取つた。そして二十五年の歳月を経て、その思想に何等進歩の跡をも認めなかつた。しかし思想は吾々の時代に於いて、殊に經濟學に於いて、急速な進歩を遂げて居るのである。學說のある點に於いては、その修正は著しい。……この四半世紀間に、G. デュノイユ、コント、ロシイ、バスタチア、ブルドン並びに社會主義全部、ケリー及び亜米利加學派、J. S. ミル、バンチキールド、マックロード、リスト、ロッシュェル等々のあることを忘れてならない。かくて何たる精神の動搖、何たる果敢な否定、何たる思想戰！」

クールノー氏の書は、泉の精アレテヌウスが濡れないで海を渡つたやうに、氣付くことなくしてこの二十五年の闘ひを經過したものゝやうである。それは思想のある鞏固さを示して居る、けれどもそれは時代錯誤だ。ある章では、ミルの國際貿易に關する意見が述べられて居ることが見出される。また一註記ではバスタチアの名が擧げられて居るのを見る。しかしそれつ限りだ。反駁するためにも、是認するためにも、そこに彼等の片鱗も認められないのである。デュノイユ氏のそれとても同様である。すなはちそれ等は無に等し。——R. de Fontmay, Principes de la théorie des richesses par A. Cournot, in "Journal des Economistes," août, 1864, p. 250-II.

五

かくて、一八六三年上告權の放棄を約束した彼であつたが、十年の後三度前著を取り上げた。一八七七年死後に至つて出版された「經濟諸學說概観」——その序文には一八七六年十月の日附がある——がこれである。彼の言葉を藉れば、「一八六三年の論文の再版でなく、その新版、すなはち一層いい順序に置かれ(と信ずる)、また生産者、「出版書肆」にも消費者、讀者にも齊しく經濟的に有利なやうに、幾多の細部を割愛して、より通俗な形に壓縮した版を公にする誘惑に負けた」のである(Revue sommaire des doctrines économiques, 1877, p. iv)。本書にも「原理」と同じく數學的分析が用ひられて居らない。も早や純粹經濟理論は、クールノーの研究の唯一の對象ではない。彼は再びより具體的な實際問題を

取り上げ、「原理」以外にも「社會經濟學から導き出された考察」によつて、「研究」公刊以後に取り戻し、或は構成した諸理論を「整理結合」した。かくて本書では、農業經濟及び工業經濟が問題となり、國家が論ぜられ、社會問題が取扱はれて、その重要部分を形成する。すなはち吾々は今や一八三八年の純粹理論の研究から漸次遠ざかり、新しいクールノーは、革新することを罷めた改革者として吾々の前に立つのである。

この書もまた依然として成功を見なかつた。知られることも少なく、また問題とされることもなかつた。だからそれはクールノーの經濟學上の著述の「最後の、最も接近し得る版」であるとは、凡そ反對のものである(E. Depire, *œuvres économiques d'Augustin Cournot*)。そしてこれ等が彼の著書を sehr selten geworden ならしめた事情であつたのである。

六

彼の晩年は仕合せでなかつたらしい。一生彼を苦しめた眼の故障は、ソルボンヌ時代にも溯るのであるが、過度の書齋生活はいたくそれを悪化させた。一八四四年の秋伊太利旅行を試みたのは、休息と氣晴が衰弱した視力の回復に役立つことを期待したからである。彼は長く眼を使つて細い仕事に従ふことが出来なくなつた。しかし研究は廢さなかつた。それは、毎日一定時間彼のために音讀して呉れる助手があつて進められたのである。一八七三年彼はE. ワルラスに宛てて、三十年來數學を放棄したことを知らせて居る。

「私はローザンヌからの貴翰及び御同封の印刷物を受取りました。それを深く感謝します。私はその閲讀に費し得る有ゆる努力を拂つてそれを讀みました。といふのは、それを貴君に申上げねばならぬのですが、三十年來私は、日々の糧を擯るために他人の朗讀に頼らなければならなくなつて居るのです。勿論數學を讀んで呉れること

の出来る少年は居りません。またこの眼で數學を讀むことも出来ません。書くに至つては、故レオナル・ユー
 ンのやうに、なほ更出来ません。三十年來私は止むなく數學を放棄して居ます。」 (Lettre de A. Cournot à
 1873, reprinted in "Economi-
 metica", 1935, p. 119-120)

一八六〇年頃に筆を執られた彼の「追想記」は、初め少し宛紙片に書き綴り、それが集められて寫字生により淨寫
 され、彼に讀み聞かされ、その訂正を経て出来上つたのだと傳へられる (A. J. Nichol, Tragedies, in "Econometica", 1935, p. 197)。私はこれ
 等の記事を讀んで殆んど胸の痛むを覺ゆるのであるが、吾々はここに至つて再び彼の方法論に觸れる機會をもつ
 である。

私は前に、彼が數學的方法の正確性を是認しつつも、數學を回避し、その適用の限界を明言して居ることを述べ
 た。上記書簡では更に強く、「算術的例證によつて代數記號の使用を排除し得ることを主張して居る。」

「眞に興味ある問題、すなはち自由な交換若しくは自由な國際貿易のそれに到達するために、私は一の新しい假
 定——二次的又は派生的作用を相殺するといふ——を設けざるを得なかつた。一旦この假定を是認するならば
 (それは實際問題に特有のものでなし、殆んど有ゆる數學適用に際して、何等かの形で見出される)、算術的例證
 によつて代數記號の使用を排除し得ると思ふ。これが、私が一八六三年の私の書冊の中で試みたところである。」
 (Lettre de A. Cournot à Léon Walras, 3 septembre, 1873, in "Econometica", vol. 3, Jan., 1938, p. 120)

ここに述ぶところは、「原理」に於いて述べられて居るところとは同一でない。或はこの頃になつて、經濟學より
 の數學排除を全的に決心するに至つたのかも知れない。けれども私は彼のこの決心に對して、猶ほ一點の疑をもつ
 のである。蓋し彼の是等言説にも拘らず、その數學放棄の眞原因がここに存せずして、上述の健康上の理由、すな

はち視力減退に在ることを思ふからである。嘗ては眼を通じてあのやうに自由にその意味、その性能を驅使した記
 號である。それが今や目にも見え難く、耳にも捕捉し難いものになつた。況んや筆に載するに至つては、なほ更で
 あると言ふ。半ば盲目となつたこの人に、數學的勞作を期待するのは、凡そ不可能事ではあるまいか。三八年の「研
 究」には幾多の誤謬を含み、「甚だ不注意」な著述として、E. ナイッシアから「證明者及び校正者としての義務を怠
 れる」ものと評された (Irving Fisher, Cournot and mathematical economics, in "Econometica", vol. 12, 1938, p. 129)。ニコルはこれを彼の視力の缺陷に歸
 して居る (A. J. Nichol, Tragedies, in "Econometica", 1935, p. 196)。私はこの推測を、彼の學者生活の後半生全體の著述に及ぼしたのであ
 る。事實彼の生涯の研究を顧みるならば、一八五〇年頃を境として、數學的から思辨的に移行して居ることが認め
 られる。そこで私の結論は、その否定的な言説にも拘らず、彼は終生その數學的方法の經濟學への貢獻と、その建
 設的價値を信じたのでないか、といふことになるのである。この事は、一八七六年に於いて三八年の勝訴を喜んで
 居る、次の「概観」序文の文章がこれを證明して居るやうに思ふのである。

「私が一八六三年にこの約束(重ねて富の理論を世に訴へることはあるまいといふ)をした時には、命長らへて一
 八三八年の私の訴訟が職權によつて再審に附せらるるを見やうとは思はなかつた。しかし乍ら三十餘年を経て、
 他の代の經濟學者等が、ボカルド卿の言を藉れば、私が嘗て甚だ臆病且つ部分的にだが、進むべき良き道を拓い
 たことを發見した。それは、私自身知らなかつたが、少し前に優れた才能の人、ヒューエル博士によつて先鞭を
 つけられて居たといふことである。いま一人の英國人、ジェヴォンス氏がこの道の擴張に努めた。そしてそれと
 時を同じうしてローザンヌの經濟學教授なる若き佛蘭西人、レオン・ワルラス氏が、學會の席上に於いて、私の方
 法及び數式に殆んど一顧をも與へない誤りを指摘すると共に、彼自身正しくこれを使用して、更に充分發展せる

一新學説を發表した。(Revue sommaire, 1877.)
(Avant-propos. p. ii-iii.)

かやうにボンヌ、ヌーヴェルもなかつたが、その晩年は決して概して仕合せと言へるものでなかつた。最後の日の近づく頃、友人間に彼を經濟學者として佛蘭西アカデミー會員に選舉する企が考慮された。そしてこの機運を促進するため、彼等は彼に一新著の公刊を慫慂した。「概観」はかくして執筆されたのである。しかし彼はこの名譽を享くるに至らず、またその最後の書の公刊——校正は了へて居たが——をも見るに至らずして、一八七七年四月二日その生涯を閉じたのである。

X X X X X X X

クルノー著作文獻

一、經濟學

1. Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses. Paris (Hachette), 1838.

新版及び翻譯

Nouvelle édition, avec des compléments de Léon Walras, Joseph Bertrand et Vilfredo Pareto, publiée avec une introduction et des notes par Georges Lutfalla, Collection des économistes et des réformateurs sociaux de la France. Paris, 1938.

Ricerche intorno ai principii matematici della teoria delle ricchezze, Bibliotheca dell'Economista, série III, Torino, 1878.

Researches into the mathematical principles of the theory of wealth, translated by N. Y. Bacon, with an essay on Cournot and a bibliography of mathematical economics by Irving Fisher, "Economic classics" edited by W. J. Ashley. New York and London, 1897.

Ibid. 2. ed. 1927.

Untersuchungen über die mathematischen Grundlagen der Theorie des Reichtum, ins Deutsche übertragen und eingeleitet von W. G. Wafrschmidt, Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister, Bd. 24. Jena, 1924.

クルノー富の理論の數學的原理に關する研究。中山伊知郎譯。内外經濟學名著、第四冊。昭和二年同 岩波文庫 1311-1312. 昭和十一年

二、數學

1. Mémoire sur le mouvement d'un corps rigide soutenu par un plan fixe. Paris (Hachette), 1829.
2. Distribution des orbites des comètes dans l'espace, Bulletin des Sciences mathématiques, t. xi. 1829.
3. Mémoire sur le mouvement d'un corps rigide soutenu par un plan fixe, Journal für die reine und angewandte Mathematik, 1830, 32.
4. Application de la théorie des chances à la statistique judiciaire et à la probabilité, Journal des mathématiques pures et appliquées, 1838.
5. Traité élémentaire de la théorie des fonctions et du calcul infinitésimal. Paris (Hachette), 1841.

アントアン・オーギュスタン・クルノーの片影

2. éd. Paris (Hachette), 1857.

要略 Elementarlehrbuch der Theorie der Funktionen oder der infinitesimal Analysis, Deutsch von C. H. Schnuse. Darmstadt, 1845-46.

6. Exposition de la théorie des chances et des probabilités. Paris (Hachette), 1843.

要略 Die Grundlagen der Warscheinlichkeitsrechnung, leichtfasslich dargestellt für Philosophen, Staatsmänner, Juristen, Kameralisten und Gebildete überhaupt. Deutsch hrsg. von C. Schnuse. 1849.

7. De l'origine et des limites de la correspondance entre l'algèbre et la géométrie. Paris (Hachette), 1847.

III 知識

1. Essai sur les fondements de nos connaissances et sur les caractères de la critique philosophique. Paris (Hachette), 1851.

Nouvelle édition, 1912.

2. Traité de l'enchaînement des idées fondamentales dans les sciences et dans l'histoire. Paris (Hachette), 1861. Nouvelle édition, avec un avertissement de L. Lévy-Bruhl. 1911.

3. Considérations sur la marche des idées et des événements dans les temps modernes. Paris (Hachette), 1872. Nouvelle édition, texte revu et présenté par F. Mentré, t. I, t. II, Bibliothèque de Philosophie. Paris, 1934.

4. Matérialisme, vitalisme, rationalism. Etudes sur l'emploi des données de la science en philosophie. Paris (Hachette), 1875.

2. éd. Corbell, 1923.

5. Dictionnaire des sciences philosophiques d'A. Frank. Paris (Hachette), 1843-1852: articles (mathématique, quantité, probabilité, d'Alembert mathématicien, Laplace).

IV 翻譯

1. Préface à la fin des Mémoires militaires du maréchal Gouvion-Saint-Cyr. Paris, 1831. p. v-cx.

2. Des institutions d'instruction publique en France. Paris (Hachette), 1864.

3. Souvenirs (1760-1860), précédés d'une introduction par E.-P. Bottinelli. Paris, 1913.

V 翻譯

1. Kater, Eléments de mécanique. (Paulin), 1834. (第11冊) De la mesure des forces du travail des machines (第11冊)

2. Herschel (John Frederick William), Traité d'astronomie augmenté d'un chapitre sur l'application de la théorie des chances à la série des orbites des comètes. Paris, 1834.

2. éd. Paris, 1836.

Contrefaçon de la première édition. Bruxelles, 1835.

3. Euler (Leonhard), Edition annotée des Lettres adressées à une princesse d'Allemagne sur divers sujets de

ハントホノキイヌマンノニノニ

ハンナ・アダム・オーキョメタン・クーンホーの片影

physique et de philosophie, Paris (Hachette), 1842.

六、書誌

Annales des Sciences d'observation. 1830, p. 9-16.

一一八 (九七四)

Jacques Marchand, La renaissance du mercantilisme à l'époque
contemporaine, 1937.

下田 博

本書題して「現代におけるマーカンチリズムの再現」(La renaissance du mercantilisme à l'époque contemporaine.)
といふ。既にこの標題の示せるごとく、本書は、いはゆるマーカンチリズムそのものに關する研究を意圖せるも
のではなく、これを特に現代との關聯において把握し、現代におけるマーカンチリスト的思想及び政策の指示を目
的とせるものである。

そも、マーカンチリズムとは何か。われは、マーカンチリズム即ちいはゆる重商主義を以て、中世カト
リック教經濟理論の衰頹より、フイジョクラフト學派及びアダム・スミス等によつて代表せられる自由主義經濟學の
勝利にいたるまで、約三百年間、ヨーロッパ諸國を支配せる經濟思想並びに經濟政策を意味するものとみる。

即ち、それは、あたかも、ヨーロッパに於ける、中世的政治經濟組織の崩壊、近代資本主義の成立、集權的民族
的大國家の發展の時代に照應するものであり、而してかゝる一大變革期を時代的背景とするものなるがゆゑに、元

Jacques Marchand, La renaissance du mercantilisme à l'époque contemporaine, 1937.

一一九 (九七五)